



# KARIBIB の回想



2023 年度 1 次隊 / 数学教育 / 渡辺 崇人

2025 年 6 月 10 日 Vol. 29

本日は、今年もやってきました Heritage Day の様子を紹介します。ナミビアにはオバンボ族、ヘレロ族、ナマ族、カバンゴ族、ダマラ族、サン族といった多くの民族がそれぞれ独自の言語や生活様式をもって暮らしています。このイベントは、そういった多様な文化を国民のアイデンティティの一つとして保護・継承し、その理解とより一層の共生を図る目的で行われるものです。配属先では 2024 年 9 月 20 日に行われましたが、実は大々的に行うイベントでもあるにも関わらず公的な祝日としては設定されておらず、聞いたところによると同じようなイベントが南アフリカで 9 月 24 日にあることから、慣例としてその周辺の日にも当国でも行うようです。



写真 1 : 同僚との集合写真



写真 2 : 同僚との記念写真

さて、幕開けはいつものように生徒そっちのけで行う同僚との写真撮影からです (写真 1)。ちなみに、ほとんどの人が着用しているピンク色の縦縞のドレスはオバンボドレスと呼ばれるオバンボ族伝統の衣装です ([Vol.12](#) 参照)。ここから約 1 時間の写真タイムが始まります。自身はトップページの画像と同じく 2023 年も着た浴衣を着用しました。そうしたところ、衣装が物珍しいこと、また自身がこのイベントに参加できるのが今年で最後だということもあり、2ショット・3ショットの撮影依頼がひっきりなしでした (写真 2)。写真を見たらお分かりの通り、周りをおばお姉さま方に囲まれ、完全にハイになっています。芸能人の気分です。ただただ幸せな時間でした♡。また、日本の大人はこういった場面ではどこかこっ恥ずかしいように大人しくしていることが多いと思います。だから大人という字を書くのでしょうか。ただこちらの人は大人だろうが子どもだろうが関係なく感情を爆発させてはしゃぎます。そこに恥じらいなどありません。こういった嬉しい時には嬉しい、楽しい時には楽しいと素直に気持ちを表現できる文化は温かくて好きだなと改めて感じます。また伝統衣装の色が影響しているのか、黒や白といったモノトーンよりも、写真のようなピンクや青といった鮮やかな色を好む人が多いように感じます。



写真3：ナミビアの伝統的な食べ物・工芸品による校内の装飾

写真3は伝統的な食べ物・工芸品による装飾です。特に右の写真の赤い容器の中身はマハングと呼ばれる穀物で、乾燥や貧栄養土壌といったナミビアの気候に適応しているため、国内ではトウモロコシよりも重宝されています。これを粉にして、パップと呼ばれる主食にしたり、オシクンドゥと呼ばれる発酵飲料を作ったりします（[Vol.3](#) 参照）。



写真4：ヘレロ族の発表（左と中央は男子、右は女子）

同僚との写真撮影が終わると次は生徒たちの発表です。民族ごとにその歴史や文化を発表します。写真4の左と中央はヘレロ族男子で、行軍のようなものを見せてくれました。彼らの民族衣装は写真の通り軍隊風であり、他と一線を画すようですが、そのルーツはナミビアの歴史にあります。ドイツの植民地時代、同族はドイツの圧政に対して部隊を組織し、武装抵抗を行いました。その際に取り入れた戦闘服や装いが写真の衣装の由来となっています。ただ、悲しいことにこの反乱を鎮圧するためにドイツ軍は20世紀最初のジェノサイドの一つとされるほどの民族大量虐殺を行い、実に80%（推定65,000人）ものヘレロ族が命を落とすことになりました<sup>※1</sup>。また写真4の右は同族女子の発表で、女性の服装の特徴はなんといっても牛の角を模した頭飾りです。同族にとって牛は財産の一つで、その数が富や社会

※1. この凄惨な出来事に関する展示は、首都 Windhoek にある国立博物館で行われており、入場無料で見学可能です。最上階には Windhoek 市内を一望できる綺麗なレストランもありますので、機会があれば是非立ち寄ってみてください。

的地位の象徴となること、また女性にとっては嫁入り道具にもなることから、食糧としてだけではない重要な役割を果たしていることがその由来となっています。

民族から少し話は逸れますが、写真4中央の左の男の子のように段ボールで帽子を作ってくる等手作り衣装を持参した生徒もチラホラ。。これは 2023 年では見られませんでした。よく似合っていて、カワイイですね😊。

今回、最後の Heritage Day を過ごし、改めて大人も子どもも一緒にはしゃぐ文化の温かみや各民族の歴史と文化、特に植民地時代の凄惨な出来事を振り返ることができた大変になる機会になりました。

ちょこっと余談

各民族のおおよその分布とその伝統衣装を図にまとめてみました。( ) 内の数字はおおよその人口の割合です。 **オバンボ族(50%)** **カバongo族(9%)** (Africa 101 LAST TRIBES を基に作成)

**ヒンバ族(7%)**



**カプリアン(4%)**



(Cultures in Namibia より)

**ダマラ族(7%)**



**バステル(1.5%)**



**サン族(3%)**



(Cultures in Namibia より)

**ヘルロ族(7%)**



**ナマ族(5%)**



(Gondwana Collection Namibia より)



また、上の分布図以外でも少数民族としてナミビア東部、主に北東部のカプリビ地方の辺りに約1%の割合でツワナ族がいます（ボツワナの多数派民族で、ボツワナの国境に近いため）。衣装はレテイシと呼ばれる幾何学模様が特徴のコットン生地から作り、青色が最も有名ですが、左の写真のように茶色のものを使う人もいます。

カプリビ地方  
(ナミビア北東)

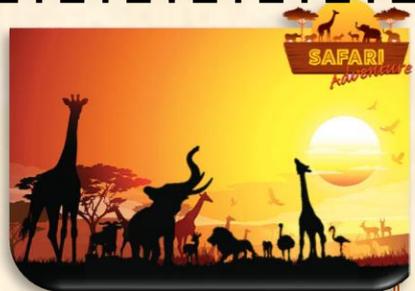


カプリビにあるボツワナとの国境沿いでは、右の写真のようにチョベ川という大きな川が東に向かって（カプリビを親指とすると指の関節から指先に向かって）流れています。そのため川に沿って国境が向かい合っている状態です。しかし検問所がある訳ではないため、夜中にナミビアの住人がボツワナ側に川を渡って侵入し、象といった高値で取引できる動物を密猟する行為が後を絶たないんだそうです。



AFRICAN SAFARI Vol.2

今回は二種類のBIG5（アフリカの5大動物）を紹介します。



《バッファロー》

前回、子どもがライオンに襲われ捕食されてしまった種ですが、大きい個体だと体重が1tにもなるほど巨体の持ち主で、十分な強さを誇ります。通常は群れで行動し、天敵が現れるとオスが子ども達を守るように外側を囲みます。また時速約50kmで走れるため、長い角を使った突進力は時に1tに及ぶそう。そのため、アフリカでは人間を最も殺す動物の一つにも数えられます。



《象》

動物園でおなじみの象ですが、野生のものは迫力が違いました。象は基本的にメスや子どもは群れで行動し、オスは単独で行動します。またよく見る水浴びは体温調節や虫よけ、皮膚の保湿のために行います。その体の大きさから陸上では最強クラスの動物として君臨し、危険察知能力、記憶力が共に高い生物です。一説によれば、人間の悪意ある言葉とそうでない言葉を聞き分けることができ、前者を発する人間を特定して攻撃するケースもあるんだとか。。。また、死んだ仲間に土をかけようとする埋葬行動も見られます。



次回：悪夢到来...?再び訪れた地獄のマラソン大会について紹介します！